

授業研究

オリゼミⅡ「映像スタジオ実習」の紹介と課題

間島 貞幸

【要旨】 本稿は、オリゼミⅡで実施している「映像スタジオ実習」の内容と意義、さらに課題について報告する。

【キーワード】 大学教育、情報発信、実践教育、スタジオ実習、ディレクターカメラマン、キャスター

1. はじめに

メディア情報学部では、2009年度より1年生全員を対象としたオリエンテーションゼミナールⅡ（以下オリゼミⅡ）で「映像スタジオ実習」を実施している。テレビの「ニュース番組」が、どのように制作されているのか、ディレクターやカメラマン、キャスターを実際に体験することで学ぶ実習である。そしてこの実習を通じて自らアクションを起こし、チームで協力することの重要性を理解し、さらに効果的な表現方法について学ぶことで、主体性や協調性、コミュニケーション能力などの社会人基礎力の向上を目的としている。

限られた時間の中で1年生たちが、より深く理解するために、平成26年度「教育力の駿大」に向けた教育助成費を受けて、実習におけるそれぞれの役割を担当する際のポイントを事前に学習するための動画コンテンツを制作した。

今回、「映像スタジオ実習」の取り組みと事前学習用の動画コンテンツの内容について紹介する。そして新たな課題を明らかにし、考察する。

2. 「映像スタジオ実習」の取り組み

2.1 指導体制

オリゼミⅡで「映像スタジオ実習」が始まったのは2009年度からである。当初、実務系教員の

斎賀、間島の二人が指導に当たった。2011年度からは、二人の教員のほかに新たに指導者として、メディア情報学部のスタッフでスタジオ収録経験のある高田昌裕氏が加わり、さらに斎賀、間島ゼミに所属する3・4年のゼミ生の有志4人がティーチングアシスタント（以下TA）として参加することになった。そして2013年度からは、TAの指導力強化のために斎賀、間島監修のもと、高田氏とTAの学生4人が中心となって指導に当たることになり、現在に至る。

2.2 活動スケジュール

メディア情報学部の1年生は、大学での勉強を支える基礎的な知識と技術を身につけ、基礎学力を伸ばすために全員、オリゼミ（春学期はオリゼミⅠ、秋学期はオリゼミⅡ）に所属している。1年生およそ150人が10ゼミに分かれて、毎週木曜1限（5ゼミ）と2限（5ゼミ）で授業を行っている。「映像スタジオ実習」は、毎回2つのゼミ（ひとつのゼミが発表担当、もうひとつのゼミがカメラマンやディレクターなどの裏方担当）で行う。残りの3ゼミは、「FMスタジオ実習」など他の実習を行っている。2014年度の「映像スタジオ実習」のスケジュールは表1の通りである。

2.2.1 ニュース原稿の作成

各ゼミの担当教員による指導のもと、学生一人一人が自分で伝えたいニュース原稿を作成する。

表1 「映像スタジオ実習」スケジュール (2014年度)

10月 2日	各ゼミでニュース原稿の作成					
10月 9日	映像スタジオ見学・デモンストレーション体験					
	<発表担当>			<裏方担当>		
10月30日	1限	國本ゼミ	2限	金ゼミ	1限	齋賀ゼミ
					2限	塚本ゼミ
11月 6日	1限	城井ゼミ	2限	間島ゼミ	1限	國本ゼミ
					2限	今村ゼミ
11月20日	1限	齋賀ゼミ	2限	塚本ゼミ	1限	瀬戸ゼミ
					2限	波多野ゼミ
11月27日	1限	本池ゼミ	2限	今村ゼミ	1限	城井ゼミ
					2限	金ゼミ
12月 4日	1限	瀬戸ゼミ	2限	波多野ゼミ	1限	本池ゼミ
					2限	間島ゼミ

作業手順は以下の通りである。

- ①新聞やインターネット上のニュースサイトなどから興味を持ったニュース記事をひとつ選ぶ。
- ②選んだニュース記事をゆったりとしたテンポで1分くらい(300文字以内)になるよう文章を短くする。
- ③ニュース記事の言葉をニュース原稿用の「読み言葉」に修正する。
- ④各自でプリントアウトして原稿完成。

2.2.2 映像スタジオ見学・デモンストレーション体験

「映像スタジオ実習」は、メディアセンター2階メディアラボ内の映像スタジオで実施する。1年生たちは、事前に映像スタジオを見学する。その際、高田氏と4人のTAの学生たちが、裏方(ディレクター、カメラマン2人)と発表(キャスター)に分かれて、ニュース番組収録のデモンストレーションを行う。そして時間が許す限り、なるべく多くの1年生にディレクターやカメラマン、キャスターを体験してもらう。彼らは、これまでに空っぽの映像スタジオは見学したことはあるが、副調整室にディレクター、スタジオにカメラマンとキャスターが配置され、テレビで見るニュース番組のような収録風景を間近に見ることで、「このスタジオでこれから自分たちが体験するのだ」と自覚し、不安と期待の声が響きスタジオ内が活気付く。

2.2.3 ディレクター、カメラマン、キャスターの役割

ディレクター、カメラマン(1カメ、2カメ)、キャスターのそれぞれの役割について説明する。三者の位置関係は、図1のとおりである。

①ディレクターの役割

キャスターやカメラマンを指揮しながら、作品制作を直接行う演出責任者。

②カメラマンの役割

ディレクターの指示のもと、1カメ(キャスター1人を撮る)、2カメ(キャスターと隣にいる

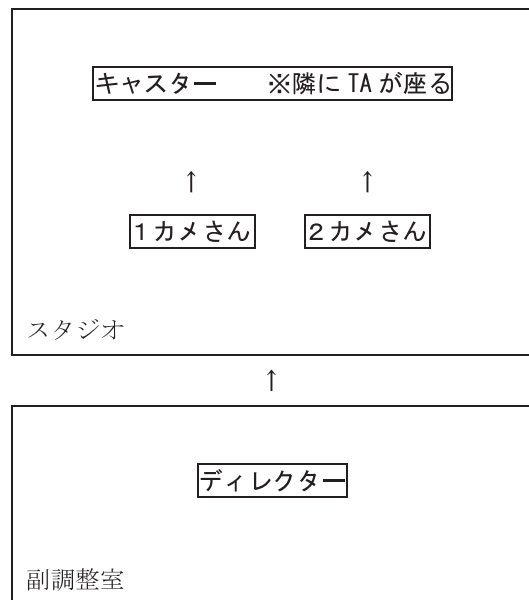


図1 ディレクター、カメラマン、キャスターの位置関係

TAさんの2人を撮る)に分かれて出演者を撮影する。

③キャスターの役割

ディレクターの指示のもと、カメラを意識しながらニュース原稿をわかりやすく読んで伝える。

2.2.4 スタジオ実習—これまでの課題、事前学習用動画コンテンツの制作

1年生を直接指導するTAの学生は基本的に毎年入れ替わるため、その都度事前にTAへの指導が必要となる。

ところが、秋学期が始まったばかりの時期は教員と学生が一堂に集まって打ち合わせする時間がなかなかとれないのが現状である。結果として、TAへの指導は、実習直前の軽い打合せ程度で終わってしまうことが多い。そのため、実習本番で、TAが1年生に曖昧なアドバイスをしたり、指導する人たちの間で実習の目標達成レベルの考え方が異なったり、という問題が発生した。

そこで平成26年度「教育力の駿大」に向けた教育助成費を受けて、指導に当たるTAの学生と1年生を対象として、実習の目的を理解し、それぞれの役割を担当する際のポイントを事前に学習するための動画コンテンツをゼミの学生らと共同で制作することにした。

一つは、ディレクター、カメラマン、キャスター三者の関係性、特にディレクターを担当する際のポイントについて紹介する『Youはディレクター』、そしてもう一つは、特にキャスターを担当する際のポイントについて紹介する『Youはキャスター』である。

制作にあたって最も重要視したことは、そのコンテンツが「短くてわかりやすいこと」である。コンテンツの長さはなるべく3分以内とし、多少説明不足であったとしても、感覚的に学生が「おもしろそう、挑戦してみたい」と感じて、実習にスムーズに入っていきような内容を考えた。

例えば、『Youはディレクター』は、以下のよう構成を考えた。

スタジオ収録全体の様子紹介～収録に臨むキャ

スター・カメラマン・ディレクター(写真1～写真5)、ディレクターの役割紹介(写真6)、悪いディレクターの例(写真7)、良いディレクターの例(写真8～写真9)、ディレクターを担当する際、特に重要だと思われるポイントはテロップ(文字)で紹介している。



写真1 動画コンテンツ『Youはディレクター』より



写真2 動画コンテンツ『Youはディレクター』より



写真3 動画コンテンツ『Youはディレクター』より



写真4 動画コンテンツ『Youはディレクター』より



写真7 動画コンテンツ『Youはディレクター』より



写真5 動画コンテンツ『Youはディレクター』より



写真8 動画コンテンツ『Youはディレクター』より

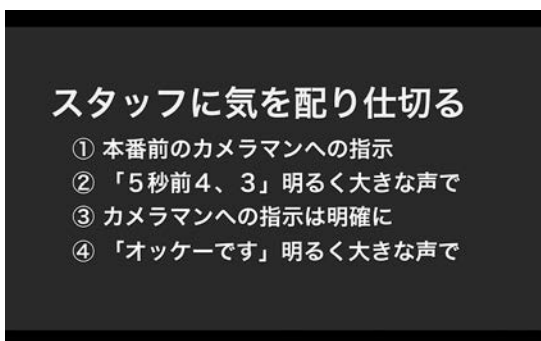


写真6 動画コンテンツ『Youはディレクター』より



写真9 動画コンテンツ『Youはディレクター』より

2.2.5 映像スタジオ実習本番

映像スタジオ実習は、発表担当（キャスター）と裏方担当（ディレクター、カメラマン）を各ゼミで1回ずつ体験する。毎回授業の冒頭で、教員が実習の流れと注意事項を伝える。続いて直接指導する高田氏と4人のTAの学生の紹介をする。その後、制作した2つの動画コンテンツを視聴しながら、それぞれのポイントについて解説する。実はこのコンテンツは、動画サイトにアップして、事前学習するよう1年生に伝えてあったのだが、全員が事前に視聴していたわけではなかったた

め、あらためて授業の冒頭で見せることにした。その後、キャスターとカメラマンはスタジオへ、ディレクターは副調整室へ移動して、実際の機器に触れながらTAの説明を受ける。キャスター担当の学生は、用意してきたニュース原稿を、本番さながらに全員一斉で大きな声を出して読む。一度声に出して読んでみて、原稿の長さは1分以内になっているか、声の大きさ、読み方のスピードは適切か、確認する。そして発表担当と裏方担当の準備が整ったところで、本番となる。以下、表2で、スタジオ収録の流れを紹介する。

表2 スタジオ実習の流れ

本番前	(キャスターは、キャスター席に着席する、マイクの位置を合わせる) (カメラマンは、ディレクターが意図する映像を撮り、いつでも始められるよう準備をする) (ディレクターは、キャスター、カメラマンに準備が整っているか、 <u>明るい声</u> で確認する)
ディレクター	「カメラマンさん、準備オッケーですか？」 (2人のカメラマン、手を上げて応える)
ディレクター	「キャスターさん、準備オッケーですか？」
キャスター	「はい、オッケーです！」
ディレクター	「(一拍おいて) 音声レベルを調整するののでリハーサルを行います！ 5秒前、4、3、2、(一拍おいてキャスターさんにキューを出す)」 (キャスター、ニュース原稿を読む)
ディレクター	「(音声レベルの調整が済んだら) キャスターさんオッケーです！」 (キャスター、カメラマンの準備が再度整っているか確認して)
本番 ディレクター	「それでは本番参ります！5秒前、4、3、2、 (一拍おいてキャスターにキューを出す)」 (キャスター、ニュース原稿を読む) (ディレクターは、ニュース原稿に合わせて、1カメと2カメを切り替える。 さらに意図する映像を狙うよう、カメラマンにその都度指示を出す) (カメラマンは、ディレクターが意図する映像を撮る)
キャスター	「以上、(名前)がお伝えしました」
ディレクター	「(収録が無事に済んだか、確認してから明るい声で) オッケーです！お疲れさまでした」



写真10 収録風景～ディレクター担当とTA(手前)



写真13 収録風景～キャスターとTA(右)



写真11 収録風景～ディレクター担当はモニターを見ながらカメラマンに指示を出す



写真12 収録風景～カメラマン担当とTA(右端)

3. 結果

3.1 学生の感想

実習終了後、1年生全員に対し、今回の取り組みに関するアンケートを実施した。1年生144人中115人から回答があった。「映像スタジオ実習」についての感想は表3の通りである。

表3 アンケート結果

映像スタジオ実習の感想
(有効解答 115名)

1. キャスターを体験した感想は？
(複数回答可)

おもしろかった 36名
ややおもしろかった 26名
緊張した 61名
良い経験をした 52名
つまらなかった 0名
何も感じなかった 0名

2. ディレクター、カメラマンを体験した感想は？(複数回答可)

おもしろかった 61名
ややおもしろかった 22名
緊張した 32名
指示を出すのが難しかった 59名
良い経験をした 63名
つまらなかった 1名
何も感じなかった 1名

今回の取り組みを経験して、学生から様々な気づきがあった。

以下、アンケートからの抜粋である。

・今回ディレクターを体験して、普段見ている

- テレビはディレクターの適切な判断と指示によって作られているのだと気づいた。
- ・みんなの協力でスタジオが成り立っていると感じた。
 - ・1分以内にニュース原稿を読むためには、自分で考えて読み方を工夫しなければならない、という発見ができた。ただ、指示通りに動くだけでなく、自分で考える、ことに意味があると思った。
 - ・カメラマンを担当したとき、ディレクターからの指示が出ないときは自分の判断で動くのも楽しかった。
 - ・ディレクターを担当したとき、カメラマンを自分のイメージで動かして、撮りたい画を撮るのも楽しかった。
 - ・もっと長時間やりたかった。
 - ・ディレクター、カメラマン、キャスターと様々な役割があるが、一人でも欠けてしまうとダメなのだと感じた。
 - ・ディレクターを担当したとき、キャスター担当の人と事前によく話し合ってからでないタイミングがつかめなくて大変だった。
 - ・ディレクターを担当したとき、カメラマンに指示を出しながら、放送画面のことを考えてスイッチングするのは難しいが、楽しかった。
 - ・ディレクターを担当したとき、カメラマンへの指示の声の出し方を工夫した方が良かった。
 - ・カメラマンは、ディレクターの考えていることを読み取らないといけないことがわかった。
 - ・ディレクターには、積極性やリーダーシップが必要不可欠だと感じた。
 - ・ニュースを伝えるには、スタッフ同士の様々な気配りが必要だ。
 - ・スタジオ収録実習を体験して想像以上に緊張したが、とてもやりがいのある仕事だと感じた。
 - ・ニュース原稿を読んでみて、人に伝える難しさを感じた。
 - ・コミュニケーションや連携が重要だ。

- ・自分が仕事をしているときに他の人の仕事を意識しながら作業することがとても重要だと感じた。
- ・ディレクターを担当するには、判断力がポイントだと思った。
- ・協力することの大切さを感じた。
- ・他の人に対する気遣いが重要だ。

3.2 考察と今後の課題

1) 事後アンケート結果のまとめ

学生にとって初めての「映像スタジオ収録」で発表担当(キャスター)、裏方担当(ディレクター、カメラマン)を体験して、緊張するものの、9割以上の学生が、「おもしろかった。ややおもしろかった。良い経験をした。」と感じていることがわかった。今回参加した1年生の事後アンケートから4つの重要ポイントが浮かび上がった。

① チームで協力することの重要性

チームで何か取り組む時は、誰一人として欠けてはならない。一人一人が意見を持って協力し合うことで、良い結果が得られることがわかった。

② 伝え方の重要性

人に何か伝える時、大きな声で明るく伝えることが、相手の理解が深まったり、やりがいを感じてもらえることがわかった。

③ 気遣いの重要性

自分勝手に行動するのではなく、相手の状況やその時の感情を気遣いながら協力し合うことが重要だとわかった。

④ 自分で考えることの重要性

人の指示通りに動くことも重要だが、時には、主体的に自分で考えて行動を起こすことも必要だということがわかった。

2) 今後の課題

今回の実習授業を通して以下の課題が見えてきた。

① ニュース原稿作成指導の徹底

これまでニュース原稿作成指導の共通資料がな

く、各ゼミの先生の独自の判断で指導が行われた。本番当日は、見やすく読みやすい原稿を用意してくる学生、スマートフォンに読み込んだ原稿を読む学生、原稿を用意してこなかった学生など見受けられ、必ずしも原稿作成指導がうまくいったとはいえなかった。今後は、原稿の文字の級数は24と見やすくし、さらに読みやすいように句読点で改行するなど、ニュース原稿の共通資料を作成し、事前配布することで、読みやすい原稿作成を徹底したい。

②事前学習用動画コンテンツの活用方法

2つの事前学習用動画コンテンツを作成し、授業の冒頭で視聴しながら解説を加えることである程度、実習へのスムーズな導入が図れた、と学生アンケートからわかった。

しかし、事前に動画コンテンツを視聴して、実習の内容をある程度理解したと答えた学生は半分以下であった。これは、事前学習に動画コンテン

ツを視聴する、という習慣が確立されていないため、と考えられる。またアンケートの中には、「動画コンテンツを見ても内容がよくわからなかった」と感じる学生がいた。そこで次年度用により理解しやすくなるよう内容を再構成し、実習が始まる1ヶ月前から学生に繰り返し告知し、事前に視聴するよう徹底させたい。

③実習回数を増やす

現在の発表担当と裏方担当を1回ずつ体験するだけでは、気づきや発見があったとしても学生全員が理解を深めた、とは言えない。そこで、オリゼミの他の実習などに関連してくるのでかなり調整が必要かと思われるが、コミュニケーションの訓練を徹底させる、と考えるならば発表担当と裏方担当をさらにもう1回ずつ経験することを提案したい。そうすればコミュニケーション能力の向上がさらに期待できるのでは、と考える。

Introduction and problem of orizemi II “Video studio practice”
by MAJIMA Sadayuki

[Abstract] This text reports the content, the meaning of “Video studio practice” executed with orizemi II , and the problem.

[KeyWords] University education, information sending, object lesson, studio practice, director camera-man, and caster